

「おさしづ」第7巻における教会事情と「道」

『おさしづ改修版』第7巻・補遺(明治20～40年)における教会事情の伺いに現れる「道」の用例を整理する。第7巻・補遺は、改修版が公刊される際、新たに収集された「おさしづ」がまとめられている。そのほとんどは個人の身上・事情についての「おさしづ」で、明治35年以後のものは少ないのが特徴である。

このなかに、教会事情に関する「おさしづ」が95件(内、巻末にまとめられているのが72件)ある。そのうち、「道」が用いられるのは11件(内、巻末に2件)、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは4件である。

「道」の用例がある「おさしづ」の割書は次の通りである。

- ①京都元斯道会講社の儀に付伺(21・6・30)
- ②遠江分教会再願の旨七月十一日のおさしづにより見合わせ居たる処、更に再願の伺(21・8・9)
- ③斯道会講社の伺(21・・・・)
- ④和爾部内に頂きしおさしづ(22・3・26)
- ⑤郡山分教会山城講社取り堅めの願(24・1・13)
- ⑥兵神分教会教祖五年祭本月二十三日の願/これまで講社にて祀り居る社破損に及び、新たに社を拵えて赤衣を祀り度く願(24・3・21)
- ⑦平野講社周旋人二、三名出直しに付、心得のため伺(24・10・1)
- ⑧深谷源次郎分教会所そばへ普請願/同派出の願(25・3・25)
- ⑨南海分教会事情願(30・3・18)
- ⑩郡山役員川合安吉熊本地方へ派出願(24・11・30) 巻末
- ⑪五條支教会事務所建築願(25・12・6) 巻末

ほとんどが明治25年までのものである。この巻の教会事情の件数自体が少ないので確定的なことは言えないが、「道」という言葉はこの時期に多く用いられていることを示すように思われる。これまでに行ってきた6巻までの「道」の用例整理からも、その傾向を見て取ることができる。

だんへ道のため運べば、何時なりと許し置こう

第7巻においても、巻末に教会事情の「おさしづ」がまとめられている。それはすべて短い言葉で、種々の教会上の願いに対して「許し置く」と言われている。この巻では、上記のとおり、巻末にまとめられた教会事情の伺い2件で、「道」が用いられている。

「一つの心一つの理運んで、又一つ治めて、だんへ早く一つという心だけは許し置こう。だんへ道のため運べば、何時なりと許し置こう。」(⑩⑪)

この「おさしづ」においても「許し置こう」と言われているが、そこに「だんへ道のため運べば」という言葉が付いている。この言葉の意味は、もう少し具体的に、どのように読めば良いであろうか。

この巻には、類似した言葉が使われた「おさしづ」がある。

「これから先の処、だんへに道を付ける。前々の道を聞き分けにゃならん。世界の道も十分の道も通し来た。一つやしきの理を治めて、それから先には皆それからそれ、だ

んへと治まる。一つ名を下ろすなら、末代の印と成る。この所、名を下ろして一つ定める。これでこそと、世界から成程の者やと言うであらう。そしたら神が持つて行くで。」(さ21・8・9 ②)

ここでは「だんへに道を付ける」と言われ、その仕方が説明されている。「前々の道」を聞き分けて、まず、ぢばの理を治めること、その先は、そこからだんだんと治まると論される。ぢばから名称が下ろされれば、それは末代の印となる。その名を各所に定めて通れば、世界から成程の者やと言われるようになる。そのようにして、「だんへ」と道が付くと教えられている。ここには、ぢばを元として各所に伸びる「道」の順序が説かれていると理解することができる。この「おさしづ」が伺われた頃は、まだ、教会本部が東京からおぢばに移されて間もなく、おぢばでの開筵式も済んでいない状況であったことから、特にこのように順序が説かれたとも考えられる。

天然自然と言う道

「だんへ道のため」という言葉には、こうした元と先とでもいうような「道」の順序が含意されているとともに、次の言葉のように時間的な段階をも含意しているように思われる。

「神一条々々々というものは古きの処の道があるで。天然自然と言う道。二年経てば二年の道、三年経てば三年の道を見えるで。」(さ21・6・30 ①)

神一条には古きの処の道があり、教祖の時代から、徐々に、年限をかけて道が見えるようになってきた。それを「天然自然と言う道」と表現されて、一気呵成に運ぶのではなく、先長く「天然自然と言う道」をコツコツと、あるいは「だんへ」と、歩みを進めるべきことを教えられている。

生涯末代

そうして通っていけば、「尽しただけの理、運んだだけの理」は十分受け取っているとされる。

「生涯末代事情、生涯末代事情なら軽き話やあろまい。尽しただけの理、運んだだけの理、十分蒔いた種であるから、皆蒔いた種は、これから十分心寄り合うて、一つ大層なる理は、十分受け取りたる。中に余儀無く事情ある。余儀無く事情は一寸は行かん。道のため、これ運び合い尽し合い、互いへである。これから道作り上げて運ぶなら、見えて来る。これまで大層でありたへ。どうなろうと思た日ある。これから十分治まるへ。これから日々楽しんでくれ。」(さ30・3・18 ⑨)

そうして日々歩みを進めているなかにも、「余儀無く事情」は起こってくると言われる。しかし、道につながる互いが、道の元にある教祖のひながたに学び、運び合い、尽くし合って通るなら、これから十分治まると論される。

以上、第7巻の教会事情の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。そこでは、「道」の順序を心に治め、「道」につながるお互いが、運び合い、尽くし合って通ることを論されている。